

わたしの主張 2026

清水町大会



青少年健全育成会 スローガン

「育てよう！ 青少年の豊かな心と大きな未来」

わたしの主張 2026 清水町大会は、青少年が日常生活の中で考えていることを広く地域の方々に訴えることにより、青少年自身が社会の一員としての自覚を高める契機にするとともに、青少年の健全育成に対する地域の方々の理解と関心を深めていただくことを目的として行っています。

また、本大会は「第48回少年の主張全国大会」、「わたしの主張2026 静岡県大会」を受けて各市町で実施している事業でもあります。

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、清水町の次代を担う子どもたちの目指す人間像として、①新しい価値を生み出す学びに挑戦し続け、自己肯定感を育み、意欲と創造力にあふれている子供、②困難に遭ってなおくじけない、心の回復（レジリエンス）を備えている子供、③自分のことと同じように相手のことを大切にでき、他者とのつながりを尊重できる子供の育成のために、コミュニティ・スクール（地域とともにある学校づくり）と地域学校協働活動（学校を核にした地域づくり）の一体推進に取り組んでいます。

教育の基本目標「町民総ぐるみで子供の育ちを支援する」を達成するためにも、地域の皆さまのお力添えをいただくとともに、温かい見守りと御指導をお願いいたします。

本日は、子供たちの鋭い感性と素直な思いから生まれた9人の主張をお聴きいただき誠にありがとうございました。

主催

清水町

清水町教育委員会

青少年健全育成会

2026.6.13



主張発表集

わたしの主張 2026

清水町大会



青少年健全育成会 スローガン

6月13日(土) 清水町地域交流センター

「育てよう！ 青少年の
豊かな心と大きな未来」

清水町へ、私からのお願い

清水町立西小学校 6年
栗田 一

私は四年生のときに、横浜から清水町に引っ越してきました。清水町で生活する中でいろいろな違いを感じるようになりました。まず、大きく変わったのは、目に入ってくる景色や自然です。特に水のきれいさにはとても驚きました。横浜では水道水を、浄水器を使って飲んでいましたが、清水町では柿田川の湧き水がとてもきれいで、そのままでもおいしいことに感動しました。味は美味しく透明感がありました。そんなきれいな水を間近で見たいと、家族で柿田川湧水公園に行きました。湧き間を見て、まるで空のような水色に驚きました。また、横浜よりも身近にある植物が多く、登下校の中でも自然を感じます。春は桜、夏は緑のきれいな葉っぱ、秋は紅葉、冬は枯れた木の枝といった、季節を感じることができます。

そして、僕はサッカーを習っていますが、そのサッカーチームの雰囲気も違ってきます。横浜でやっているときはサッカーに対しての要求は少なかったのですが、静岡県では、サッカーについて思いを持つ人が多く、時にはけんかをするほど熱く話すこともあります。しかしそれだけ、みんなが真剣に取り組んでいるとも感じています。今は、横浜でやるよりもサッカーが楽しく感じています。私はそんな静岡県、そして清水町が大好きで

しかし、そんな清水町にもお願いしたいことが三つあります。もっと素敵な清水町になると私が思ったことです。実現が難しいこともあるかもしれませんが、「私の主張」として聞いていただけたらと思います。

一つ目は、広場がほしいということです。僕はサッカーを習っていて、自主練をしたいのですが、広場が少ないです。また、ボールを使うことができる公園も少ないです。なぜボールを使えなくなったか、先生に聞いてみました。近くに住んでいる人の迷惑になっていると聞きました。まずは自分たちが、公園の決められたルールを守って、正しく公園を使えるようにしたいです。その上で、自分の好きなことができる広場や公園がほしいと思います。

二つ目は道に明かりをつけてほしいです。夜に道を歩くとき、何も見えないくらいに暗くなることが多く、とても不安になります。一度、歩いているときに車のライトが急に現れ、ぶつかりそうになりました。目立つように蛍光色の服を着ていますが、それでもあぶないことがあります。私たちはまだ子供で身長ものびきっていません。安全のために街の明かりを増やしてほしいです。

三つ目は、バスの本数を増やしてほしいです。お父さんが会社に行くときに、朝行くときはバスで行けるけれど、帰るときはバスがないから、遅い時間に迎えにいかなければいけません。また、私がサッカーの練習に行くときには、いつもは親に送ってもらっていますが、バスがあると自分で

行くことができるので、迷惑をかけずにすみません。
ぜひお願いしたいです。

私は横浜から清水町に来て、とても清水町のことが好きになりました。だからこそ、もっとみんなが住みやすく便利な町になってほしいです。清水町には、他の市町にはない良さがたくさんあります。その清水町をもっとよくするために僕なりに考えてみました。いろいろな人の笑顔が増える清水町にするために、ぼくはルールを守ります。地域のあいさつ運動の際、ぼくたち西小でがんばっている世界のあいさつを広げます。ボランティア活動に積極的に参加します。私にできることを全力でやっていきます。一緒に清水町をよくしていきましょう。

指先でつぶされる命 守れる命

清水町立清水小学校 6年 深草 瑠璃

みなさんは生き物を大切にしていますか。わたしは、虫や虫類などの生き物がものすごく好きで、たくさん飼っています。

カブトムシやクワガタ、ヤモリやトカゲにカエルなど、かわいくてわたしのこうき心をくすぐる生き物がたくさんいます。最近、わたしが大好きなのは、ヤモリです。垂直なかべをすいすいと上っていく様子におどろきます。ガラス越しに見てみると、とても小さな指先で、ペタリとくっついているのがとてもかわいいです。あきることなく、ずっと見ていることができます。

このような、わたしの生活を明るくしてくれる小さな生き物たちには、みんな命があります。そして、いつかは死んでしまいます。特に、一生けん命にお世話をしたのに、残念ながら、命を失ってしまう場面に出会うと、ものすごく悲しい気持ちになります。

(この前えさを忘れたからかな。きりふきを
忘れたからかな。わたしがいけないんだ。それ
とも、温度変化にたえられなかったのかな。飼

育かん境が良くなかったのかな。)

などと、原因をずっと考えてしまいます。そして、もう死なせないように努力をします。わたしにとって、生き物たちを大事に思うことは当たり前です。

しかし、世の中にはそうではない人もいます。生き物を平気でおもちゃのようにあつかう人です。

ある日、わたしはSNS上で、思わず目をふさぎたくなる光景を見ました。トカゲのしっぽを切って集めたり、バッタの足をもぎ取ったりして喜んでいる動画投稿があったのです。そうです。そのような動画のほとんどが「バズねらい」と呼ばれる、過げきな動画配信で、注目を浴びようとするものです。そんなことのために、小さな生き物たちを殺したり、いじめたりするのをやめてほしいです。

小さな子供は、ありをつぶしたり、ありの巣をふさいだりして遊ぶことがあります。わたしも小さいころは虫が苦手で、そんなことをしました。けれども、成長するにつれて、それがかわいそうだと思えるようになります。ありが仲間のために働いているんだな、なんだか手伝ってあげたいな、そんな気持ちです。小さいけれど、そこに大事な命があるのです。

わたしたちは、この指先を通して 小さな命と向き合ってきたのです。時には、命をもてあそんでしまったり、時には、かわいそうなことをしたりします。けれども、それを反省して、次に生かすのが成長です。小さな命の大切さを想像すれば、心が通じ合う気がします。

SNS上では、小さな生き物の命だけではなく、人間の命や相手の気持ちさえ、想像しない人も目立ちます。

楽しく見ていたはずの動画のコメントらんに、自分の評価を持ち上げるために、乱暴な言葉や厳しいコメントがあふれていることがあります。「お前のコメント0点」「語力なさすぎ」など。このようなコメントを受け取ったら、きっと、自分の意見を書くことをおそれてしまうと思います。

わたしたちは、指先でさわる画面の向こうに、友達、家族、いろいろな人とつながっています。わたしもタブレットを使います。文字を打ってから見返して、相手がいやな気持ちにならないかなと、気をつけています。

バズねらいの動画投稿者は、画面の向こう側に心があることを想像できないのでしょうか。わたしたちは、悲しいけれど、指先ひとつで、大切な命や心を傷つけてしまうのです。

しかし、指先ひとつ、言葉ひとつで、元気づける力も持っています。わたしの誕生日に、お母さんが手紙を書いてくれました。手書きのメッセージです。もらって、とてもうれしくて、心が温まりました。お母さんの指で書かれた温かい文字で、わたしは大切にされているんだなあと改めて気づきました。

これから、わたしはこの指を、人を喜ばせたり、うれしい気持ちにしたりするために使いたいです。小さな命も、わたしたちも、この指先ひとつで、悲しませることもできれば、喜ばせたり、温かい気持ちにしたりできます。みなさんもいっしょに、その指を、人を喜ばせられるように使ってみませんか。

自分の行動が支えになる

清水町立南小学校 6年 植松 怜菜

医者や看護師はきっと誰もが尊敬すると思う。患者や家族と直接触れ合い、病と闘う表のヒーローだからだ。ならば、裏のヒーローは誰にも気付かれず、尊敬されずに終わってしまうのか。それは違うはず。「たしかに患者さんは表のヒーローに感謝していると思う。けれど裏のヒーローにも感謝している人もいる。」これは、ヘアドネーションを経験して、医療について考えた私がたどり着いた思いです。

最初に私がヘアドネーションを知ったきっかけはとある本でした。その本は、抗がん剤治療のせ

いで髪が抜けてしまい、悲しんでいる白血病の女の子の話でした。その本を読み終えたとき、がんばって病気と向き合って治療しているのに体だけでなく心まで辛くなっている人を知って私は胸が締め付けられそうになりました。私は、少しでも力になることをしたいと思い、白血病の治療について調べました。調べてみると、ヘアドネーションという普段は聞かない言葉が出てきました。そのことを看護師の母に聞いてみました。そうしたら髪が抜けてしまった人に髪を寄付するボランティア活動ということを教えてくれました。それを聞いて私はこれなら自分も役に立てる！と思いました。

最初は少し抵抗もありました。友達にも褒めてもらえるような自慢の髪だからこそ、当時の私は切ったあとの自分を気にしてしまい寄付することを決心するのに少し時間がかかったのです。でも、誰かの役に立てるのなら。この自慢の髪で、一つ笑顔を増やせるなら、寄付しよう。そう決めて美容室に行きました。

ヘアドネーションに使えるのは 31 センチの長さからです。当時の私は、短くなりすぎるのを気にして、31 センチぎりぎりの長さでお願いしました。その時の私はイメチェンがてら…とまだ軽い気持ちもあったからです。切ってもらった髪を見てどんな人の手元に届くのかなと思い浮かべました。郵便局に行って寄付の手続きをするときも「これで誰かに喜んでもらえる。」という嬉しさでワクワクやドキドキでいっぱいでした。

何ヶ月かたって、髪がまた伸びてきたころ私はもう一度ヘアドネーションをしたいなと思いました。寄付したときの喜びに近い気持ちと、誰かの喜ぶ顔が思い浮かんだからです。その時にふと、もう一度ヘアドネーションについて調べました。そうすると衝撃的なことを知りました。実はヘアドネーションの 31 センチ以上の理由は、半分に折って使うためだったのです。私の寄付した髪ではたったの 15 センチのウィッグしか作れないことが分かりました。それにウィッグを求めている人の 9 割がロングヘアを希望しているそうです。

私はもっと長い髪を寄付すればよかったと後悔しました。だからこそ、私はもう一度寄付することを決心しました。

私は元々、いろいろな本や看護師の母の影響を受けて、医者という職業に深く興味を持っていましたが、ヘアドネーションを経験して、相手のことを考えた貴重な経験をしたからこそ、あらためて医者になりたいと、強く思うようになりました。今の私には、まだ少しのことしかできない。でも、その少しのことをするだけで誰かの笑顔が増える、そう信じています。ヘアドネーションは、患者さんの心を支える裏のヒーローになれる。そう私は思います。

みなさんには、病気にかかってしまいづらい思いをしている人がたくさんいること、その人達とはとてつもない努力をしていること、そして表のヒーローだけがその人達を支えているわけじゃなく、誰でも少しの行動でその人たちの支えになれることを知ってほしいです。私も裏のヒーローになれたと思います。みなさんも今の自分にできることを考えてみてください。きっとその行動が誰かの支えになるはずです。

「夢」

沼津商業高等学校 2年 岩崎 凜空

高校生になり、将来について考える機会が増えたことで、私は「夢」という言葉にプレッシャーを感じるようになりました。周りには、すでに明確な将来の夢が決まっている友人がいます。そんな姿を見るたびに、私は取り残されたような焦りを感じることもありました。中学生の頃になんとなく描いていた夢も、年齢を重ねるにつれて「本当にこの仕事が自分に向いているのだろうか」と、疑問に変わっていきました。そんな模索のなかで、新しく私の心に灯ったのが「福祉の仕事」への興味でした。

私が福祉の仕事に興味を持ったきっかけは、足

腰が弱くなった祖母の手伝いをしたことです。もともとお年寄りと接することが好きだった私は、荷物を持ったり、歩くのを支えたりしました。そのとき、祖母が満面の笑顔で「ありがとう」と言ってくれたのです。誰かの役に立てたという実感が、私の心を満たしました。それまではどこか遠い世界の話だと思っていた介護が、自分自身の身近なものへと変わった瞬間でした。

さらに昨年の夏、介護施設のボランティアに参加しました。最初は緊張して自分から話しかけられずにいた私を、利用者の方々は温かい言葉で迎え入れてくれました。その優しさに触れて緊張が解け、自然と会話を楽しむことができました。また、職員の方々が生き生きと働く姿を見て、「私もこの人たちのように、プロとしての優しさと寄り添う心を持って、誰かの人生を支えたい」と強く思うようになりました。

しかし、福祉の現状を深く調べるうちに、私は深刻な人手不足と高齢化という、日本の危機的な現状を知りました。商業を学ぶ高校生として社会の動きに目を向けると、最近の介護現場では、移動を助けるロボットや見守りセンサーなどの「機械化」が急速に進んでいます。ある施設では、先進技術の導入によって職員の身体的・精神的ストレスが大幅に解消され、離職者ゼロを達成したそうです。体力的負担を減らす機械化は、これから的高齢化社会に不可欠であり、素晴らしい先進技術だと確信しました。しかし同時に、ひとつの疑問が浮かびました。「機械化が進みすぎたら、人と関わることで生まれる温もりはどうなってしまうのだろう」ということです。私が祖母の笑顔に救われたような喜びや、人と人との間に生まれる信頼や安心感は、決して機械では生み出すことができません。

だからこそ私は、人と機械のどちらか一方に頼るのではなく、それぞれの強みを融合させることが大切だと考えます。大変な肉体労働や管理は機械に任せ、それによって生まれた「心のゆとり」を使って、利用者の方一人ひとりと深く向き合う。これこそが、業務の効率性と、福祉の本質である

「人の温かさ」両立させる、これからの福祉の姿ではないでしょうか。

私は今、完璧に将来の夢を決めきれているわけではありません。しかし今回、福祉の未来を真剣に考えたことで、人を支える仕事がどれほどこれからの社会に必要とされているかを学ぶことができました。今でも街の中でお年寄りを見かけるたび、「自分にできることはないか」と考えることがあります。これからは心の中で思うだけでなく、勇気を出して一歩を踏み出す「積極性」を大切にしていきます。日々の生活の中でアンテナを広げ、感じたことを学びへと変えながら、これからも私の歩むべき未来を、責任を持ってじっくりと考えていきたいです。

これで発表を終わります。ご清聴いただき、ありがとうございました。

諸行はまだ捨てたもんじゃない

桐陽高等学校 3年
久保田 元

みなさん。突然ですが、左右を見てください。どうでしょうか。右見ても左見ても人間。そして、「何をされているのだろう」とにこやかに笑いあったり、隣の人と思わず目が合った。そのようなことが起きたのではないだろうか。実はそれは、人間ならさも当たり前のことである。しかし、自然では、そのルールは当然のように破られる。多くの動物は目を合わせた瞬間、それを敵意とみなす。にこやかに笑うのも、本来は相手に自らの牙を示す行為。論外だ。そんな弱肉強食の自然界で我々の先祖は確かに生きてきた。だが、いつの間にかその牙は失われ、代わりに「幸せ」というものを開発した。だが、現代人ははるか昔からの当たり前の感情をどこか特別な物と誤解している。その結果、過労、不安、自殺、争いが絶えない世の中。朝だるい体をたたきおこして、昼は脳死で働く、そして夜は、ブルーライトを見つめ、寝る。本当にそんな毎日だろうか。否、絶対にそんな日々

ではない。諸行とはそんなに無常ではない。「幸せ」は今日も幼いあの日にかくれんぼをしているだけである。今日は皆様にそれを思い出してもらいたい。

まず、前提として、これを感じられる生物は人間だけである。あるのは生か死のみだ。彼らは、生の代償に死を積み立てつづけられている。もしくは、死の回避のために生を払わせつづけられる。そんな日々だ。もちろん否定はしない。我々もそんな世界で生きてきた。そんな世界こそ「諸行は無常」である。だから、我々の先祖はそれを回避するために「幸せ」を開発した。「幸せ」を感じることは当たり前じゃない。まずはそれを分かってもらえたらどうか。

では、変わって、人の世界はどうだろうか。世界に目を向けてみると、ウクライナ侵攻、パレスチナ問題、世界中に広がる飢餓。幸せを感じられる人間が、それが無いという状況。こんなに苦痛なことではない。そんな状態だ。私はふと、思うことがある。学校のベランダから見えるきれいな空。果たしてこの空はどこまでも続いていて、同じ空の下では戦争や紛争が起きているのかということである。「諸行は無常」だ。何の気も無しに人の命と「幸せ」が蹂躪される。だが、無常の世を放棄してはならない。先代が「無常な諸行」から「幸せ」を開発したように、「幸せ」を与え、享受できるのも人間だけなのだ。それができる人は、案外近くにいるのかもしれない、と思う。

それならば、「友達」という概念も人間だけではないのだろうか。動物にももちろん、「仲間」という概念はある。だが、それはただの利害関係に過ぎない。いっしょにいと強いから。そんな些細なことだ。しかし、この「友達」という関係はどうも不思議だ。居たいからいっしょにいる、なんかいいからいっしょにいる。合理的な「仲間」と打って変わって、なんとも不合理的だ。はっきりと申しあげると、私は高校受験に失敗した身だ。そのときは今いる高校へ行くことに絶望していた。1人孤独。絶望の淵。「諸行は無常」である。しかしどうだ。今、この文章を書いている5月20日は私

の誕生日である。たくさんの友達に「おめでとう」と言われた。

「諸行は無常」とは、先の見えない不安を歩いている情景だと私は思う。一寸先は闇。だがそこでそっと手を繋いでくれるのが友達だと私は思う。中学、高校で多くの素晴らしい友達と出会った。私はこれから大学受験が控えている。先の見えない不安だ。だが、友達がいる限り、私は無常の世界を歩くことをあきらめない。そして、その手をつなぐことこそが、幸せではないだろうか。前述したとおり、幸せを与え、享受する。それができる人は案外近くにいるのかもしれない。友達は私の絶望という「無常な諸行」を「幸せ」に変えてくれた。そんな人は案外近くにいた。私も誰かへ与えられる人になりたい。友達がそうしてくれたように。

足元で不意にダンゴムシを見つけた幼児のように。ふと振り向いたら、真っ赤な夕日になっていたように、「幸せ」は一瞬である。そして、当たり前ではない。だが、確かに存在している。「諸行はまだ捨てたもんじゃない」と少しでも思ってもらえたらどうか。そう思ってもらえたのなら、私は「無常な諸行」を変え、誰かに与えるということができた。「幸せ」である。

普通という見えないルール

清水町立南中学校 3年
柏木 胡乃葉

この世の中には、「校則」や「法律」という目に見えて分かるルールがあります。でも、目に見えないルールも存在することを、みなさんは知っていますか。

二年前、中学校に入学した私は何不自由なく、中学校生活を送っていました。小学校が同じ人たちばかりだったので、友達にも困ることなく、「中学校ってこんなに楽しい場所なんだ。」と思わずにはいられないほどでした。

数日後、皆さんの学校でもよく行っている、「多

数決」で、物事を決めることができました。

その時、先生が言いました。

「みなさん決まりましたか。では次の三択から選んで手を挙げてくださいね。」

そう言って投票が始まりました。私が選んだものは、一番初めに言われましたが、誰も手を挙げません。

「何で誰も挙げないの。」

同じ意見がないということに私は戸惑い、手を挙げられませんでした。結局、私は意見を言うことができず、多くの人が賛同した意見に手を挙げてしまいました。知らない何かに、押し潰されている感覚がありました。

一年後、クラスが変わり、中学二年生になりました。仲の良かった友達が一緒に安心していました。

ある日の休み時間、友達と話しているときのことです。誰かが言いました。

「最近、宿題多くない。」

そうすると、周りからすぐに、「それな」という声上がり、私もその流れで「確かに」と返しました。でも、その後ふと思いました。

(私は、本当にそう思っているのかな。)

友達との会話の中で、「それな」や「確かに」という言葉をよく聞くし、私自身もよく使っていると思います。会話をスムーズにする便利な言葉だけれど、それに頼りすぎると、本当に自分の考えは相手に伝わっているのだろうかと考えてしまいます。

この二つの経験から、私たちは知らないうちに「みんなと同じであるべき」という見えないルールに縛られているのではないかと感じました。

実は、このように人が周りの意見や行動に影響されてしまうことは、心理学の研究でも明らかになっています。

アッシュという心理学者の実験では、周りの人が同じ答えを言うと、本当は違うと思っていても、その意見に合わせて回答してしまうという結果が出ています。つまり、人は自分の考えを持っていても、周りの人の様子や雰囲気によって行動が変

わってしまいます。また、日本では「空気を読むこと」が大切だと言われることが多くあります。ある意味では社会の中で生活していくうえでとても重要なことだと私も思います。しかし、その考えが強くなりすぎると、「周りと同じでなければならない」という気持ちにつながってしまうこともあるのではないのでしょうか。

このように、私たちは知らないうちに、見えないうちにルールに影響されているのかもしれませんが。周りに合わせることは、もちろん大切なことです。しかし、それだけを大切にしてしまうと、自分の考えや気持ちを表すことができなくなってしまいます。本当は、一人一人が違う考えを持っているはずで、違う意見があるからこそ、新しい考えや、お互いのことをより深く理解する気持ちが生まれるのではないのでしょうか。自分の意見を伝えることで、相手の考えも知ることもできます。そうしたやりとりが中学校生活の中であるからこそ、私たちは成長していくのだと私は思っています。

私はこれから、周りの空気に流されるだけでなく、自分の考えを大切にしていきたいです。たとえすぐに手を挙げるができなくても、少しずつでも自分の意見を伝える勇気を持ちたいです。そして、誰もが安心して自分の考えを言えるような教室になってほしいと思います。そのためには、周りとは違う意見を持っている人がいても、それを否定するのではなく、互いに受け入れ合うことが大切です。一人一人の考えが尊重されることで、見えないルールに縛られない、よりよい関係が生まれます。今を生きているすべての人たちは、見えないルールに縛られるのではなく、「自分の声」に耳を傾けてみてほしいです。

自分らしさと自分勝手の境界線

清水町立清水中学校 3年
小野 杏奈

最近よく耳にする「自分らしさ」とは何だと思えますか？私はそこまで難しい問いではないと思

っています。自分の好きなように自分の好きなことを行うこと、それが私の考える「自分らしさ」です。それでは、なぜ問いかけたのか。私が今日、皆さんに考えていただきたいのは、「自分らしさだけを考えると、自分勝手になってしまう」ということです。自分の好きなことを好きなように行う、例えば、クラスで話し合って決めたことが自分の思う形でなかったとしましょう。その時、「自分らしくないから」という理由で否定し続けたら、クラスの意見はまとまりませんし、クラスメイトからは「自己中心的」だと嫌われる原因にもなるでしょう。では、そうなるのを防ぐために、全てを我慢して、首を縦に振り続けたら「自分らしい」と言えるのでしょうか。今の例えは極端すぎますが、実際、「自分らしさ」と「自分勝手」の境界は曖昧だと思います。

私はこれまで十年間のダンス経験を通じて、ヒップホップとケーポップをそれぞれ五年ずつ経験してきましたが、常に「同じ振付の中で、自分らしさをどう表現するか」という壁に直面してきました。ダンスの技術とは、単なるリズム感や体幹の強さだけではなく、振付を捉えて、自分を最も輝かせる形へとアレンジを加えて初めて、自分のものにすることだと考えています。最初の頃の私は、周りと同じように正確に踊ることばかりを意識しており、「間違えないこと」が一番大切だと思っていました。しかし練習を重ねるうちに、それだけではどこか物足りなさを感じるようになり、自分なりの表現とは何かを考えるようになりました。ダンス未経験の方は、「振付を忠実に再現すること」が正解だと思うかもしれませんが、しかし、ダンス仲間の表現に触れる中で、私が惹かれるのは常にその人特有の「ズレ」や「解釈」でした。例えば、拍の表裏の絶妙な間に置くアクセントや、言語化できない、その人独自の質感、そして前回のレッスンから見られる変化など、振付の先にある個性に魅力を感じます。同じ振付であっても、人によって全く違う印象になることに気づいたとき、私は初めて「表現する」ということの面白さを実感しました。そして、自分もまたそうし

た表現ができるようになりたいと強く思うようになりました。しかし、そのような「ズレ」や「解釈」も、ただ自分の好きなように踊れば良いというわけではありません。ダンスは一人で完結するものではなく、仲間と一緒に一つの作品を作り上げるものでもあります。特に発表会では、一人ひとりの動きが揃っているからこそ、全体としての美しさや迫力が生まれます。もしそれぞれが自分の表現だけを優先してしまえば、作品としてのまとまりは失われてしまいます。だからこそ私は、「自分らしさ」とは、周りとの関係の中で成り立つものだと考えるようになりました。決められた振付という枠があるからこそ、その中でどう工夫するか、どこで個性を出すかを考える意味があります。全体を壊さない範囲で、自分の色を加える。そのさじ加減を考え続けること自体が、「自分らしさ」を深めることにつながるのではないのでしょうか。そしてそれは、単に周りに合わせるということではなく、「自分を持ちながら調和する」という姿勢なのだと思います。

この考えは、ダンスだけでなく、日常生活にも当てはまると思います。自分の意見を持つことは大切ですが、それを押し通すことだけが正しいわけではありません。相手の意見を受け入れながら、その中で自分の考えをどう活かすかを考えることが、本当の意味での「自分らしさ」につながるのだと思います。時には譲ることも必要ですが、その中でも自分の軸を失わないことが大切なのだと、ダンスを通して学びました。

私はこれからも、「自分らしさ」を大切にしながらも、それが周りとの調和の中でどう活きるのかを考え続けていきたいと思っています。自分だけで完結する表現ではなく、周りに関わることでより深まっていく表現を目指していきたいです。そして、「自分らしさ」と「周りとの関係」の両方を大切にできる人でありたいと思います。

うわさとの正しい向き合い方

清水町立南中学校 3年
庄司 千咲

私たちの周りには、「人のうわさ」があふれています。学校での友人同士の会話やインターネット上の書き込みなどさまざまな場面で存在します。うわさは友達とコミュニケーションをとるきっかけの一つにもなりますが、その反面、誰かを深く傷つけてしまい、取り返しのつかないことになってしまうかもしれません。

「うわさ」という言葉を調べたところ、「その場にはいない人や事柄について根拠や確認がないまま無責任に広まる話のこと」とありました。うわさの特徴として正しい情報ではなく「聞いた話」として広まるため嘘が含まれていることも多いと感じます。また、人の不満や悪いうわさは、良いうわさよりも速く多くの人に広まりやすい傾向があるそうです。

うわさは、友達同士の会話などで「ちょっと聞いた話なんだけど」と軽い一言で始まることが多くあります。しかし、その軽い一言が、相手によっては軽くない場合があります。

例えばあまり知らない人の悪いうわさを聞いたとき、その人のことをよく知ろうとせず、そのうわさを信じてしまうことがあります。このうわさが広がることによりどんどん真実とは遠ざかり、うわさの方が真実のような感覚に陥ってしまうというおかしなことになってしまうかもしれません。

最近はインターネットやSNSが誰でも簡単に使えることにより、うわさの広まりが速くなっていると思います。私たちが身近に使用するSNSの多くは誰かの発言や写真・動画がすぐに拡散されます。その情報に事実ではないことが含まれている場合、一度拡散された情報を消すことは難しく、うわさを流された人は苦しむことになると思います。

私は、人がうわさをする理由には「知りたい」という好奇心や「知っている」という承認欲求にあ

と思います。うわさ話は、話題として盛り上がりやすいため深く考えずに話を広げてしまいます。しかし軽い気持ちで誰かを傷つけてしまう可能性があることを忘れてはいけません。

またうわさは、言う側だけではなく聞く側の対応も大切だと考えます。私たちはうわさ話を聞いたときその会話にどのように反応しているか、多くの人はその会話が本当か嘘なのか考えようとせず、同調してしまうと思います。うわさを広めない、このうわさでトラブルに巻き込まれないようにするためには同調せずに、違う話題に変えたり、時には否定したりすることも大切です。

ですが、私は全てのうわさが悪いものだけではないと思います。友達が頑張っていたことや、友達の良いところを色んな人に広めたりする良いうわさもあります。悪いうわさに比べ、良いうわさは広まりにくいと聞いたことがあります、なぜ良いうわさは広まりにくいのでしょうか。

理由として、人は悪い情報に強く反応してしまうからだと思います。自分の危険を及ぼす情報は自分の身を守るために大切なもので、悪いうわさはもしかしたら自分にも被害が来るかもしれないと感じさせます。そして周りにも被害が起こらないようにすぐにその情報を伝えようとするからです。

また、悪いうわさは良いうわさに比べて、人の感情を強く動かすことが多く、他の人にも共有したいという気持ちになってしまう可能性があります。このようなことにより、悪いうわさの方が簡単に広まりやすく、良いうわさは意識しないと広まらないのではないかと感じました。

私は、人のうわさに対して「言わない」「広めない」「反応しない」ということが大切だと考えます。言わないとは自分のうわさを広める当事者にならないことです。広めないとは誰かに聞いた情報をそのまま伝えるのではなく、情報が正しいかどうかをしっかりと考えることが必要です。また自分のことをうわさされている場合、感情的に反応しないことが重要です。

人のうわさは軽い気持ちで生まれ、簡単に広ま

るものだと改めて思いました。だからこそ、言葉一つ一つの重みをしっかり考え、発言する前にそれを言っ自分が後悔しないか相手が傷つく思いをしないか、しっかりと冷静に考えるべきです。うわさに流されない心の強さと、思いやりを持った行動を心がけることが大切だと強く感じます。

米の素晴らしさ

清水町立清水中学校 3年
山内 彩羽

私がよく行くお店には入口に米の売り場があります。そこにはいつも多くの米が売れ残っていました。

スーパーなどの店舗で売れ残ったりして廃棄される米は、一日約八トン。米を捨てるということは食品ロスをしてしまっているということになります。実際に日本では年間約四六四万トンが廃棄されています。これは一人あたり一日におにぎり一個分を廃棄している計算になります。また、食品を廃棄するときに排出される二酸化炭素により地球温暖化が進み、異常気象をもたらすなど食品ロスは地球規模の大きな問題となっています。では、この捨てられてしまう食べ物を減らすためにはどうすれば良いのでしょうか。

私は食べ物の大切さやその食べ物が食卓に届くまでの過程を知ることが対策になるのではないかと考えました。

そう考えたきっかけは、親に勧められて参加した米作り体験です。これは、小さな田んぼを借り、田植えや収穫だけでなく、耕すことや雑草の駆除までも体験できるものです。この体験を通して私が第一に思ったのは、米を育てるということとはとても大変だということでした。耕す作業では、ぬかるんだ田んぼに立つだけで段々と足が沈み、足が抜けなくなってしまうたり、バランスが上手く取れなくなってしまうたりして転んでしまいそうになりました。そんな場所で重たい道具を持ち、さらに耕すことは難しいことでした。また、稲を

植える作業では、体勢を低くした状態で、ぬかるんだ田んぼで田植えをするので、腰が痛くなった。バランスが上手く取れなかったりと、これも大変な作業でした。

これらの体験を通して、私は普段何気なく食べている米は、大変な苦勞の結晶であり、それを廃棄するという行為はその苦勞を台無しにする良くない行為だということだと実感しました。これは米以外の食べ物でも同じです。私はそれまでは、好き嫌いが激しく、食べ残しをすることも多くありましたが、この経験をきっかけに、これからは残すのではなく、食べられる人に譲ったり、自分の食べられる分だけにしたりするなど、工夫をして少しずつ、食べ残しを減らそうと思うようになりました。

「四六四万トン」という食品廃棄物のとても規模の大きい数字を聞くと、私たちにできることなんてないのではないかと思い始めるかもしれません。しかし家庭からはなんと二三三万トンもの食品ロスが出ています。つまりこの問題は私たちが関わっていると同時に私たちにも対策ができるということです。では、どのように対策したらよいのでしょうか。

私は、小学校の頃、SDGsについての授業で給食の残飯がどれだけ出るかを見せてもらい、こんなに残されているのかと衝撃を受けました。食品ロスを減らすために、食品ロスを見える化し、気をつけようと思えるようにクラスみんなに食品ロスの日記を書いてもらい、ポスターの掲示も行いました。その結果、「食品ロスが減ったよ！」と言ってくれる友達もいました。小学生の私にも食品ロスを少し減らすことができたのです。

誰でも食品ロスを減らす対策ができます。食品の大切さを知ること。自分に合った食品ロスへの対策を考え、実行していくこと。これが食品ロスを減らす上で大切なのではないのでしょうか。

食品ロスは地球規模の問題です。決してこれが当たり前だと思っただけはいけません。この先悪化した場合、地球に住めなくなってしまうかもしれません。これを常に頭の中に入れ、食品ロスを減ら

す活動を行っていくことが、これからの生活をつくる、未来へ繋ぐ架け橋になると考えます。

※ 提出原文のまま記載しています。

司会者

清水町立南中学校				
3年生	名倉	虹花	さん	
〃	佐野	璃希	さん	
〃	永井	莉央奈	さん	
〃	堀田	愛佳	さん	

発表者

題名	清水町へ、私からのお願い 清水町立西小学校6年生 栗田 一 さん			
題名	指先でつぶされる命 守れる命 清水町立清水小学校6年生 深草 瑠璃 さん			
題名	自分の行動が支えになる 清水町立南小学校6年生 植松 怜菜 さん			
題名	夢 沼津商業高等学校2年生 岩崎 凜空 さん			
題名	諸行はまだ捨てたもんじゃない 桐陽高等学校3年生 久保田 元 さん			
題名	普通という見えないルール 清水町立南中学校3年生 柏木 胡乃葉 さん			
題名	自分らしさと自分勝手の境界線 清水町立清水中学校3年生 小野 杏奈 さん			
題名	うわさとの正しい向き合い方 清水町立南中学校3年生 庄司 千咲 さん			
題名	米の素晴らしさ 清水町立清水中学校3年生 山内 彩羽 さん			



「育てよう！

青少年の豊かな心と大きな未来」

青少年健全育成会 スローガン

わたしの主張 2026 清水町大会

令和8年6月13日

作成 清水町教育委員会社会教育課
清水町教育委員会

清水町青少年健全育成会

静岡県駿東郡清水町堂庭6-1

電話055(972)6678

